

# 私の贅沢

— 第10回 —

## 贅沢な約束

小島ゆかり

女子会という言葉が流行るずっと前から、女子会をやっている。大学時代の親友二人との、たった三人の会。

「なにがあっても年に一回会おう」と決めてから十年、大学一年で出会ってからはほぼ四十年、今年もめでたく女子会を開催した。

そもそも二人と知り合ったのは、わたしの方向音痴がきっかけである。早稲田大学に入ったのはよいけれど、まあ恐ろしいほどのマンモス大学で、人が多いうえに、校舎もややこしい。自分の出るべき科目の教室になかなかたどり着けない。文学部の選択科目の「古事記」が、なぜか政経学部や法学部のある本部キャンパスの校舎で行われていて、おまけにやけに建物が込み入ったあたりの教室で、わたしはそこに行くことができずに前期の単位を落としてしまった。真面目なのに……。

なにか気配に気づいたのか、「いっしょに行かない？」と声をかけてくれたのが彼女たち。おかげで後期に「古事記」の単位をとる

ことができたのだ。本当にありがとう。

と、そんなわけで女子会。

楽しいことも苦しいことも、こんなにたくさんバリエーションがあるんだなあと感心するほど、三人三様にいるいるなできごとがあつた。泣いたり笑ったりなだめたりたしなめたり励ましたり、女子会の場面もドラマティックに変化した。そして年々、互いの愛情が深まる。

たいていはバイキングのランチ。お酒は飲まない。顔にも体にも多数の皺を刻み、脳みその皺だけがしだいにつるつる磨滅してゆく中年女子三人組は、はたからみればかなり暑苦しいかもしれないが、本人たちは心涼しく、まことにすばらしい時間を過ごしている。

三人とも仕事があり、病気の家族や高齢の親の介護もあるから、約束事はたった一つ、「年に一回会う」こと。

この贅沢な約束のために、過去の時間も未来の時間も、大切なものになる。